

# 第43回 『涙の太陽』を生んだ 統治下沖縄のパイオニア精神

『涙の太陽』のオリジナル歌手、エミー・ジャクソンの話によると、テレサ・テンの台湾でのデビュー曲は北京語による『涙の太陽』だったそうです（1967年、テレサ14歳）。

私が初めて台湾を訪れたのは、1978年でしたが、台北よりも石垣島の緯度が低いこと（つまりさらに赤道寄り）を知り、当時、世界チャンピオンの座に君臨していた具志堅用高に対して、よくこんな遠いところから上京してきたなあ、と別の意味で敬意を表したことがあります。

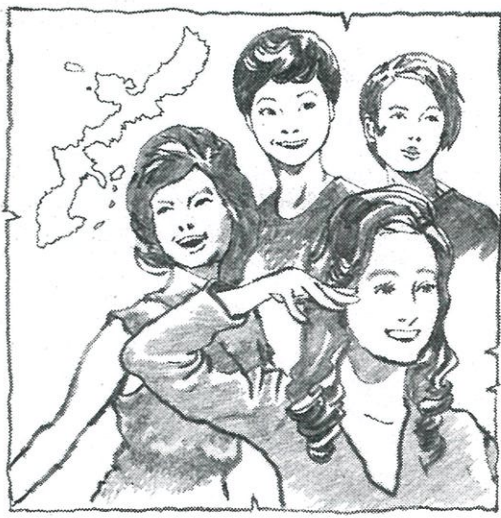
石垣島ほどは離れていませんが、『涙の太陽』の作者・中島安敏の出身地は沖縄本島的那覇です。戦前生まれの中島は、米軍統治時代の昭和28年、17歳で渡米、音楽学校でジャズを学び、同34年に帰国します。その後、コロムビア・レコードから作曲家としてデビュー、ポリドールに移り、ポリドール在籍時代の青山ミチ（13歳）にデビュー曲『ひとりぼっちで想うこと』などを提供、その後、フリーになり、昭和40年4

月、湯川れい子とのコンビで前述の『涙の太陽』を発表。  
エミーのオリジナル盤発売の翌月

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いままで

堀井六郎  
絵・松本浦



には、青山ミチが日本語カバー盤をリリース、エミー盤では怪しげな「R・H・Rivers」なる筆名を用いていた湯川ですが、青山盤では本名になっています。湯川の本語歌詞の処女作ということですね。「R・H・Rivers」のRれい子、Hホットの頭文字だそう  
で、湯川の名をもじったものです。  
『涙の太陽』は「ギラギラ」で始まる安西マリア盤が最も知られていますが、安西の日本語歌詞は青山ミチ盤を踏襲しています。  
デビュー前のエミーの歌唱指導に中島の妹でジャズ歌手の沢村美司子が当たっていたという噂もありました。昭和16年生まれ  
の沢村は、戦後、米国傘下の沖縄で7歳の頃から米軍

基地で洋楽を歌い、上京後、コロムビアから『一人ぼっちじゃつまらない』で歌手デビューしています。フインガー5のルーツかな。  
そのうえ驚くことに、兄に続けとばかり昭和30年、14歳で渡米、ハリウッド製のミュージカル映画『ラズヴェガスで逢いましょう』や『八月十五夜の茶屋』に出演しています。  
昭和33年8月、沖縄県立首里高校が「甲子園の土」を故郷の地に持ち帰ることさえできなかった時代より、さらに遡った頃に渡米し、夢をつかもうとした沖縄生まれの兄妹の度胸とパイオニア精神には驚嘆するばかりです。  
発売当時、洋盤と信じられた『涙の太陽』ですが、そこには沖縄と米  
国で米ドル紙幣に囲まれながら培った「本物志向の魂」が込められていました。先頃、安室奈美恵が沖縄県民栄誉賞を授与されましたが、「県民」ではなかったパイオニアたちにも拍手を送ります。

すでに古稀を過ぎたエミー・ジャクソンですが、今でも元気に歌い続け、今年82歳になる中島は、現役でボイストレーニングの指導をしています。

ほりい・ろくろう 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私の「昭和歌謡考」第4集「しあわせになろうね」』（グスコ出版）が好評発売中